

Reports

市町村
レポート
松山市

松山市長
中村時広さん



中村時広市長

東京の逆をやれ！ オンリーワンのまちづくり

市民が主役

中村時広市長は就任以来、「坂の上の雲のまちづくり」を都市政策の基本理念に掲げてきた。2007年には核となる「坂の上の雲ミュージアム」が完成。多くの司馬遼太郎ファンが足を運ぶ。まちづくりの視点は「市民が主役」で、行政は参加する側の立場だ。コンセプトは「みんなでつくるうみなの松山」。自分のまちは自分たちで考えてこそよいまちになりますよということだ。

中村市長は一方で、大切な税金をいい加減な計画には使わないと釘を刺す。単なるポーズでないことは、2006年完成の「ロープウエー街」の商店街の再生事業で証明された。過去、商店街は3分裂していた経緯があり、再生事業にあた



まちづくりの核となる「坂の上の雲ミュージアム」



365日24時間の小児救急医療体制が完備されている

ってもそれぞれが独自要望を出してきた。しかし、中村市長はひとつにまとまらないなら1円も使えないと突き放し、2年間ゼロ予算にしてしまったのだ。驚いたのは店主たち。市長は本気だと思いきり、3年後には一本化した計画要望を提出する。「無論即決しました」と中村市長。3年間の工事中、売上げは激減したが、商店街からの苦情は起きなかった。整備後、売上げは伸びて地価は12%上昇する。自分たちの手で成功を勝ち取った好例だ。

まちづくりのビジョンと市長の役割

中村市長がめざすのは「オンリーワンのまちづくり」だ。「これまでの地方行政は、霞ヶ関主導の下でメニューを選択

を描くのが私。後はいかに市民に参加してもらえるかです。絵の具を混ぜ、色を塗っていくプロセスを楽しく演出しなければなりません」。もちろん、完成イメージは市長の頭の中にある。それを市民主導でつくり上げていくには、相当の手腕が必要だ。

基盤となる地域力

オンリーワンのまちづくりには、地域力の裏付けがある。松山市は全国で最もくらしやすい都市のひとつなのだ。まず、安心安全面では、365日24時間稼働の小児救急医療体制がある。2007年度末には、島しょ部を除くほぼ市内全域で通報後10分以内に救急車が到着する体制が完了。自主防災組織の結成率は90%を超える。中村市長は「大都会では望めないシステム」と胸を張る。

先進的なIT通信の活用としては、市街地に「まつやまインフォメーション」を設置し始めた。行政や災害の情報はじめ、観光案内やショッピング、イベント情報、民間広告といったさまざまな情報を映像や電光文字などで発信する。将来的には、大きさや機能の異なる情報端末を市内100カ所程度に設置する予定という。

実際に愛媛県のくらしぶりを数値でみ



城下町松山のシンボル松山城

すればことが進みました。しかし、今や地方行政に必要なのは自らの政策立案力なのです。まちづくりにおいても同様だ。そこで行き着いたのが東京の真似をしないこと。東京はあらゆるエンターテインメントを集約することでまちの魅力を出し、人を惹きつけるパワーを発散している。しかし地理や人口規模のハンデイを考えると、地方が同じことをすれば失敗は明白だ。「東京の逆を行けばいいのです」。つまり、過去に目を向け、その土地に眠る文化的な遺産や自然に焦点を絞り、徹底的に磨きこむこと。それが、オンリーワンのまちづくりにつながっていく。

市長の役割については、ビジョンづくりと賛同者をどれだけ集められるかに尽きるという。「白いキャンバス地に下絵



松山市は日本で最もくらしやすい地方都市だ。路面電車が発達し、温泉も身近にある



まちづくりを自分たちの手で企画し、成功させた「ロープウエー街」の商店街



まつやまインフォメーション。高さ2m85cmで坊っちゃん列車の車掌帽姿をイメージしたという



2008年には11回目を迎える俳句甲子園。松山市には知的フィールドの土壌がある

ると、1日の余暇時間6時間57分（全国第2位）、通勤所要時間平均20・3分（全国3位の短さ）、そして、松山市では家賃33㎡当たり3052円（全国の都市で最安価）、物価指数98・4（全国5位の安さ）と、都心通勤者にとって羨ましい数字が並ぶ。「温泉も漁場も近い。松山にいと都心でくらす気にはなりません」と中村市長。この財産をまちづくりに活かさない手はない。

「恵まれた地域力に、UDの政策を盛り込めば、さらにすばらしい地域ができると思っています」。ハード面だけでなく、文化や芸術、教育、福祉を充実させて感動や生きがいを育む。「坂の上の雲のまちづくり」は、日本を考え、歴史を考え、自分を考える知的フィールドとなる。「ここ1、2年がまちづくりや財政強化など、すべてを集約させる大事な年」と語る中村市長に迷いは微塵もない。

Reports

市町村
レポート
西条市
西条市長 伊藤宏太郎さん



伊藤宏太郎市長

「人づくり」と「しくみづくり」で 地方主権の時代を 走る

施策表現のひとつだ。
西条市は2004年11月に東予地方の旧西条市・東予市・丹原町・小松町が合併し、新「西条市」となった。人口約11万6000人。本格的な地方分権の時代を迎える今、西条市は「自立と自活」の精神と、「自己責任」と「自己決定」の原則をにかけて積極的な地域づくりを推進している。

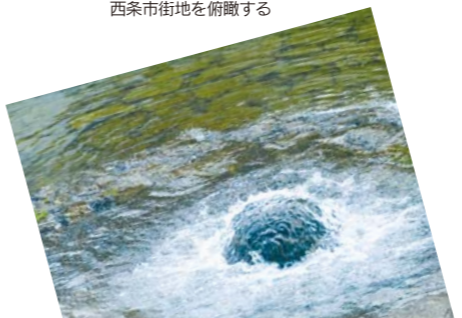
キーワードのひとつ「人がつどい、まちが輝く、快適環境実感都市」の「実感」という言葉にも市長の思いが込められている。
伊藤市長の所信表明は「まず第一に産業振興をやるべし」というものだった。そこで市長が着目したのは「情報」の創造的な活用の重要性である。とかく地方では、情報の酸欠状態に陥りがちで、限られた有力者だけの判断でことが決まることが多い。伊藤市長はあえてこの旧弊の打破に挑む。それが、産学連携による人脈と情報の編集である。中央そして全国と直結した人的ネットワークの構築による西条型プロジェクトのソフトづくりだ。「私は、情報の命は「量・質・鮮度」だと思います。小さい田舎町にも、やる気はあるはず。それを具現化していくため

「6次産業の創出」とは？

「1×2×3の6の数式」と、伊藤宏太郎市長は語る。農林水産の一次産業、食品加工の二次産業、流通・観光の三次産業、この3つをかけ合わせて総合産業としての6次産業を創出する、というのが市長のかかげる食料産業拠点構想のキャッチフレーズである。「元氣なアイデア市長」で知られる伊藤市長のユニークな



西条市街地を俯瞰する



ここでわかった特性は、巨大な地下水盆地があり、市内を流れる加茂川の伏流水が浸透する800haのエリアであれば、2mも掘れば水が出る。しかも日本でも有数の名水だということだった。

「そこで西条は名実ともに

に、株式会社組織の第3セクターを使う。儲けたら民間同様、税金を払う。赤字になれば株式会社同様、市民に対して責任を負う。役員構成は、地元の人を一切入れています。」
首長の使命は、大局的な構想のもとに人と情報を繋ぎ、地元のために新しいシナリオを描くプロデューサーだ、という確固たる認識が伝わってくる。

恵まれた自然資源を活かす

旧西条市内には「うちぬき」と呼ばれる地下水の自噴井が多数湧き出している。その数約2000本。1日の自噴量は約9万m³にのぼる。四季を通じて温度変化が少なく、生活用水、農業用水、工業用水に広く利用され、名水百選にも選定されている。伊藤市長は、従来、無計画だった水資源利用を考え直し、1996年から4年間で詳細に地下水の調査を実行した。そ

に「水の都」とうたっているわけです。旧西条市域では、今でも地下水を飲料としている人たちが多く、提供している水道水もたいへん良質です。歴史的にみても、この名水があったから江戸時代から西条は行政の中心となってきたと思いますから、これからも未来永劫大切にしたいですね」と伊藤市長。
ちなみに、西条市は、1970年代から工業用地として海沿いを埋め立て、ダムの水を活用する企業や事業所を集中的に配置するという誘致計画を進めた。それによって西条市は、町中に鉄工所や工場のない「住工分離」が進んだまちづくりになっている。

道がつなぐ、人・もの・情報

「道路のおかげで、生活や産業政策ができてきたものなんです」と語る伊藤市長は、道路問題でも県内や中央を駆け回っ



高速交通の要・松山自動車道



市内に多数湧き出している自噴水「うちぬき」



西条市の新しい観光・交流エリア「鉄道歴史パーク in SAUJ」に建てられた「四国鉄道文化会館」

「道路陳情のときには、「雨予が良くなったら、東予が良くなる。隣の町が良くなれば、うちの町も良くなる」との思いであちこちに声をかけつけてきました。道路は起点と終点の行政区同士の地域住民・産業が一体となってやる意志が、結果的には国策につながる。当初は同じ陳情のバスに乗っていたのに、テープカットをできあがった自治体は、だんだん降りてしまつて、最後まで一緒にゴールしようというのがないのは残念です」と難しさも語る。

ところで、市長のかかげるユニークな施策に「合宿都市構想」がある。

「四国山脈に立派な林道がありますから、東海大学スポーツ医学研究所との連携で高地トレーニングの環境づくりを進めています。いきなり海外の高地に行くより、まずは環境も良くて食べ物もおいしいこちらでやってほしいということで、近隣の自治体とも協力して進めています。「四国のでっぺん酸欠マラソン大会」にも四国以外からたいへん多くの参加者があります。とにかく、まずは四国に来てほしい。島内交流を進めながら「明日の四国づくりを考える市町村長の会」の活動も進めています」と伊藤市長の夢はふくらむ一方だ。

Reports

市町村
レポート
愛南町

愛南町長 谷口長治さん



谷口長治町長

最南端の元気なまち 地域資源を活かす 社会参画

人材の活用

四国最南端にある愛南町は、2004年に5町村が合併して誕生した。人口2万7000人足らずの小さな町ながら、地域資源の有効活用では群を抜いている。原動力は町民と町の協働だ。谷口長治町長は「町民との連携を進めているボランティア推進や産地直送、グリーンツーリズムは、UDの思想に重なる部分がある」と語り、ぜひまちづくりに取り入れたいと意欲を見せる。

人材は特に重要な。7年前の町長就任時、財政は悪化の一路を辿っていた。だからといって行政サービスの質を落とすわけにはいかない。谷口町長はボランティアの力が必要と考え、支援を求めた。議会や町内会を熱心に説いて回ると同時に、商店街の中心地にボランティアグループたちの拠点「プラザ城辺」を設置した。結果、障がいのある人の社会参画、子育て支援、河川の整備、草花の植樹や間伐において、県下トップの実績を上げるようになった。悪臭を放つと疎んじられた僧都川だが、今では清浄活動のおかげで虫が舞う。



「山出憩いの里温泉」と働く人々

「山出憩いの里温泉」の施設運営を受託。現在は6名の障がいを持つ人たちが、受付や掃除、風呂の清掃など、仕事内容も賃金も健常者と同条件で働いている。「山出地区はとくに地域活動が盛んで、住民たちは障がいのある人との施設運営協力を喜んで引き受けています」。

自然資源の活用

農産物の活用では、産直市が元気だ。現在7店あり、年間7億円を売り上げる。トップを行くのが農家直営の「緑新鮮市」。農家の高齢者が小遣い稼ぎにと申し出たのが始まりだが、今では1億8000万円を稼ぐ。これに次ぐのは、第3セクター「一本松ふるさと新興株式会社」で、こちらも1億7000万円ほどを売り上げる。当初の



四国一の水揚げを誇る鯉の水揚げ風景

障がいのある人の社会参画では、30年前から「障害のある人もない人も、ともにくらす町」に取り組んでいる。現在は、行政などが主催する「南宇和心の健康を考える会」（考える会）と、まちの住民が主体となり取り組む「南宇和障害の社会参加を進める会」（進める会）の2グループが熱心だ。「考える会」は、行政をはじめ各機関がネットワークを組み、社会参画をすすめる。一方の町長が会長をつとめる「進める会」は、「考える会」や地域と連携しつつ障がいのある人の社会参画を支援する。

「進める会」のサブグループ「南宇和福祉リサイクル活動」は2006年、NPO法人「ハートinハートなんぐん市場」を設立した。同法人はリサイクル品の販売などにつづき、指定管理者制度による「山出憩

扱ひ品目は農産物のみだったが、今では売り上げアップのために海産物も並べている。一方の水産は、年間100億円の生産額がある町の基幹産業だ。とくに鯉は四国一番の水揚げを誇る。ユニークなのが、魚を使った食育「ぎょしよく」だ。「かつおの社会的研究」をテーマとする、愛媛大学農学部水産社会学科若林良和教授の発案で、「しよく」には、食・職・色・触といろいろな字を当てている。海辺の子たちでありながら魚の知識が少ないことを危惧し、さまざまな角度から「魚」を教育し好きになってもらう試みだ。早速小魚を丸ごと食べられるようになったと喜ぶ母親が続出しているという。

こうした自然資源はグリーンツーリズムにも活かされている。困世世代定住施策の一環および高齢化が進む町の活性化のために「農家漁家民宿」を提案したのがきっかけだ。しかし、民家で旅館法の基準を満たすのは困難を極めた。県に規制緩和を願い出たところ、許可が下り愛南ツーリズム特区を取得することができた。2007年4月にスタートし、現在7戸が営む。実家に帰ったような雰囲気や手料理が好評だ。「町には昔からの漁業民宿が20戸ほどあるので、相互交流を盛んにし、家族連れなどさまざまな観光客ニーズに応えたいですね。町の健全経営に向けた協働体制は揺るがない。



買い物客が絶えない産直市「緑新鮮市」は1億7000万円を売り上げる



ボランティアグループの拠点「平山寮」



「道の駅みしょうMIC(ミック)」でも産地直送品は人気だ



竹林を間伐するボランティアグループ



農家民宿「西の家（にしのか）」と主人の佐藤和彦さん。教員定年退職後故郷へ戻り、グリーンツーリズムに参加